

発刊にあたって

平成23年3月11日午後2時46分―三陸沖を震源とするマグニチュード(M)9.0の巨大地震は、想像を絶する大津波となって岩手、宮城、福島3県はじめ東日本沿岸に襲いかかり、大きな爪痕を残しました。

黒い波の壁となって押し寄せた「平成の大津波」は、営々と築き上げてきた港町をなめ尽くし、多くの市民が犠牲となりました。建物を破壊し尽くし、人も田畑も車も流し去り、街は一瞬にしてがれきの廃虚と化しました。さらに福島では東京電力福島第一原子力発電所で事故が発生。東日本は「見えない恐怖」にもさらされることになりました。

天災、さらに人災とも言うべきあまりにも過酷な現象と因果。そして被災され犠牲となられた多くの人々の悲痛な思いを私たちは決して忘れません。あの日から岩手は、東北は、日本はどう歩み、どう変わるのか。これでいいのか。古里の次世代にこの現実をしっかりと伝え残さなければなりません。

岩手日報社の記者たちは、津波襲来の瞬間を身をもって各地でとらえ、被災状況を克明に記録し続けてきました。

亡くなられた方々への哀悼と鎮魂の思いとともに、歴史的な検証、警鐘の記録として特別報道写真集「平成の三陸大津波」を出版しました。

「岩手に生きる、あなたと歩む」―その思いを胸に、私たちは心一つにして復興、新生に向けて歩み続ける古里の姿を、これからもしっかりと見守り、伝えてまいります。

平成23年6月

岩手日報社 代表取締役社長 三浦 宏

特別報道写真集 平成の 三陸 大津波

2011.3.11 東日本大震災
岩手の記録



[表紙写真] 3月11日、宮古市役所から撮影

洋野

久慈

野田

普代

田野畑

岩泉

宮古

山田

大槌

釜石

大船渡

陸前高田

平成の 三陸大津波

特別報道写真集

2011.3.11 東日本大震災
岩手の記録

contents

陸前高田	002
大船渡	014
釜石	028
大槌	036
山田	046
宮古	056
岩泉	069
田野畑	070
普代	073
野田	074
久慈	076
洋野	082

震災後の岩手 **それでも前へ**

長引く避難生活 086

広がる支援の輪 098

天皇、皇后両陛下ご来県 108

復興への歩み 114

検証 平成の三陸大津波[資料] 122

保 護

陸前高田

景勝の街、傷跡無残

大津波はすべてを持ち去った
人々が日々の暮らしを営む街は
一面のがれきの山と
泥と海水に覆われた地へと一変
絶望的な光景に悲痛な叫び声が響く



3月11日午後3時30分

津波は瞬く間に街をなめ尽くし、足元に迫ってきた
陸前高田市気仙町の泉増寺から陸前高田支局・鈴木多聞撮影



著作権

保護



3月11日午後3時26分 第一波が気仙川を逆流し川に架かる橋のみ込む＝陸前高田市気仙町の泉増寺から撮影

街なめ 尽くした 濁流

〔平成三陸大津波 記者の証言〕

陸前高田・泉増寺から撮影

陸前高田支局・鈴木 多聞 たもん

地震発生時は、陸前高田市高田町にあった陸前高田支局にいた。テレビが台から落ちたものの、建物自体に被害はなく「それほどひどい揺れではない」と感じていた。車が発する時も、3年過ぎた支局が約30分後に跡形もなくなるとは想像もしなかった。

山沿いに車を走らせ、高台にある同市気仙町の泉増寺（せんぞうじ）へ。道路脇に車を止めて10メートルほど石段を登り、見晴らし台にたどりついた。海まで気仙川沿いに約2キロ。まだそれほど緊張感はない



3月11日午後3時29分 膨大な水量に耐えきれず川からあふれた出た津波が住宅地や田畑に広がっていく

かった。

「まずいことになるのではないか」と感じたのは、地震発生から約30分後。「高田松原地内で津波が水門を越えました」という防災無線の放送を耳にしてからだ。

望遠レンズで見ると、河口からザブザブと川をさかのぼってくる濁流が見えた。水流に耐えられず橋が曲がり、のまれていく。

高田松原沿いの国道45号では、ガソリンスタンドの天井が海中に沈もうとしていた。気仙川の向こうの住宅密集地まで約500メートル。かなたから家々が倒される音が、遠雷のようにバリバリと聞こえた。巨大な水の流れが見慣れた街をのみ込んでいく。市街地は全滅だった。

津波は気仙川の堤防を越え、見晴らし台の近くの工場と民家をなぎ倒した。そのまま止まることなく海水の流入が続き、高台のふもとまで達した。

ついさつき登ってきた石段がみるみる水面下に沈んでいく。高さは地面から7、8メートルまで達しただろうか。危険を感じ、寺の裏山をさらに上へ登った。

流入が止まったことを確認し、見晴らし台に戻ると、おびただしい量のがれきや火のついた建材が沖の方へゆっくりと流れていくのが見えた。

避難を呼び掛けていた防災無線もサイレンも聞こえない。静寂の世界が広がっていた。鳥の声だけがむなしく響く。そばにいた避難者が「こんなの陸前高田じゃない」とうめいた。理解を超えた光景を前に、ただぼうぜんとするだけだった。